一緒に知ろう!

HPV感染症 HPVワクチン

ヒトパピローマウイルス

HPVが引き起こす病気を防ぐ方法があります。

HPVワクチンについて知ってください

まずは、HPV感染症とHPVワクチン、
子宮頸がん検診について知ってください。
周りの人とお話ししてみたり、
かかりつけ医などに相談してみてください。
大切な未来を守る、
そんなワクチンについてみんなで話しましょう。

HPV

HPV感染症、子宮頸がん、HPVワクチンに関する情報は
下記ホームページをご覧ください。

厚生労働省
「ヒトパピローマウイルス感染症
～子宮頸がんとHPVワクチン～」

HPVワクチンの接種	小6から無料*
子宮頸がん検診	20歳から2年に1回

*小6～高1相当の女子が対象です。

学校教育関連 | 先生・生徒・保護者の皆様へ

ヒトパピローマウイルス感染症の
予防接種に関する相談支援・医療体制強化のための
地域ブロック拠点病院整備事業

作成：愛知医科大学病院疼痛緩和外科・いたみセンター
監修：ヒトパピローマウイルス感染症の予防接種に関する相談支援・医療体制強化のための地域ブロック拠点病院整備事業
発行年月：2026年4月

1 HPVってどんなウイルス？
（ヒトパピローマウイルス）

HPV（ヒトパピローマウイルス）はとてもありふれたウイルスで、一度でも性的接触があれば男女を問わず誰でも感染する可能性があります。ウイルスの型は200種類以上が知られています。女性特有の**子宮頸がん**をはじめ、男女とも引き起こされる**中咽頭がん、肛門がんなどのがん**、また、**尖圭コンジローマ**等の病気もHPVへの感染が原因で発症するといわれています。特に、**近年子宮頸がんになってしまう若い女性**が増えています。

尖圭コンジローマってどんな病気？

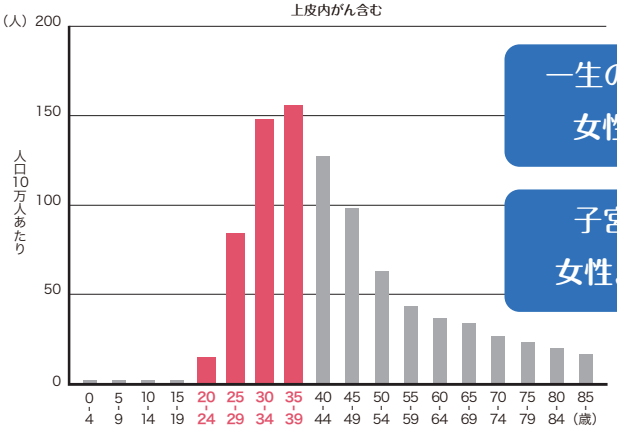
HPVの感染により、**性器周辺に生じる良性腫瘍**です。感染後、数週間から2～3か月を経て、**イボ状、鶏冠（とさか）状の小腫瘍**が多発します。

01 子宮頸がんについて

子宮頸がんは、毎年多くの女性から「いのち」と「未来」を奪っています。

日本では、毎年約1.1万人が子宮頸がんにかかり、約3,000人が亡くなっています。**20代・30代の若い世代で急増するのが特徴**です。30代までに治療の過程で子宮を失う人も年間約900人いると考えられており、手術やその後遺症で**ライフプラン**が大きく変わってしまう可能性があります。

子宮頸がん罹患率※1
上皮内がん含む



一生のうち子宮頸がんになる人
女性76人のうち1人※2

子宮頸がんで命を落とす人
女性300人のうち1人※3

【出典】国立がん研究センターがん情報サービス
※1：「がん統計」2018年全国がん登録
※2：2018年累積死亡リスク
※3：2020年累積死亡リスク

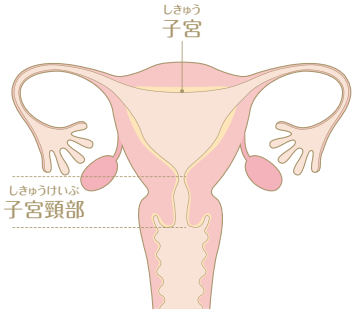
02 子宮頸がんってどんな病気？

子宮頸がんは、子宮の入口付近にできるがんです。**ほとんど自覚症状がなく、症状が出た時にはかなり進行していることもあります。**

症状 生理に関係ない出血、悪臭を伴う茶色のおりもの、下腹部や腰の痛みなど。

原因 主な原因は、**HPV**への感染です。

治療 早期に発見されれば、子宮を残すことも可能ですが、手術では子宮の一部を切り取るため、**不妊症になったり、妊娠した時に流早産のリスクが高まる**可能性があります。もっと進行すると、子宮を広範囲に取る手術や放射線治療が必要となり、**手術の後遺症**（おしっこが出にくい、足がむくむ等）に苦しんだり、場合によっては、**命を落とす**ことがあります。



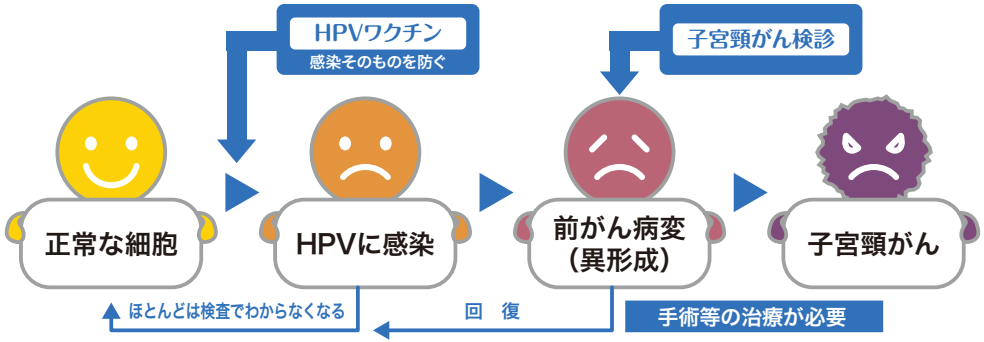
03 HPVに感染したらすぐにがんになるの？

HPVに感染しても、すぐにがんになるわけではなく、いくつかの**段階**があります。通常は感染してもほとんどの人では時間が経つと検査ではわからないほどになりますが、**一部の人でHPVがなくならず**、ずっと感染した状態（持続感染）になることがあります。数年から十数年かけて子宮頸がんになってしまうことがあります。

04 子宮頸がんの予防方法ってなに？

ワクチンと**検診**の**二本柱で多くの子宮頸がんを予防**することができます。

子宮頸がんの進行



2 HPVワクチンって？

HPVワクチン定期接種

公費負担！

対象者 小学校6年生から高校1年生相当の女子

ワクチンの種類

9価ワクチン（シルガード®9）

接種スケジュール

HPVワクチンは一定の間隔をあけて、合計2回または3回接種します。接種する年齢によって、接種のタイミングや回数が異なります。

一般的な接種スケジュール

1年以内に接種を終えることが望ましいとされています。
※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。
※2・3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上（※2）、3回目は2回目から3か月以上（※3）あけます。

01 ワクチンの効果は？

現在定期接種（公費負担）のワクチンである9価ワクチンを接種すると子宮頸がんの原因ウイルスのうち80-90%の感染を予防することができます。**性的接触で感染するため、性交経験前に接種することが最も効果的**です。また性交経験後であってもワクチンの効果は認められています。

02 注射は痛いの？

筋肉注射なので、直後は、注射した部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあり、まれに、重いアレルギー症状や神経系の症状が起こることがあります。HPVワクチンだけでなく、どんな予防接種にも副反応リスクはあります。注射への恐怖や不安が少しでもある人は、**無理をしないでお医者さんや保護者、周りの大人に相談しましょう**。

03 接種に向けてどうしたらいいの？

HPVワクチンは予防接種法に基づく定期接種で、**対象者は公費負担**で接種することができます。16歳未満の人は保護者の同意が必要ですので、まずは保護者に相談してみましょう。接種することが決まったら、予約が必要ですので、接種場所などをお住いの市町村のホームページ等で確認しましょう。

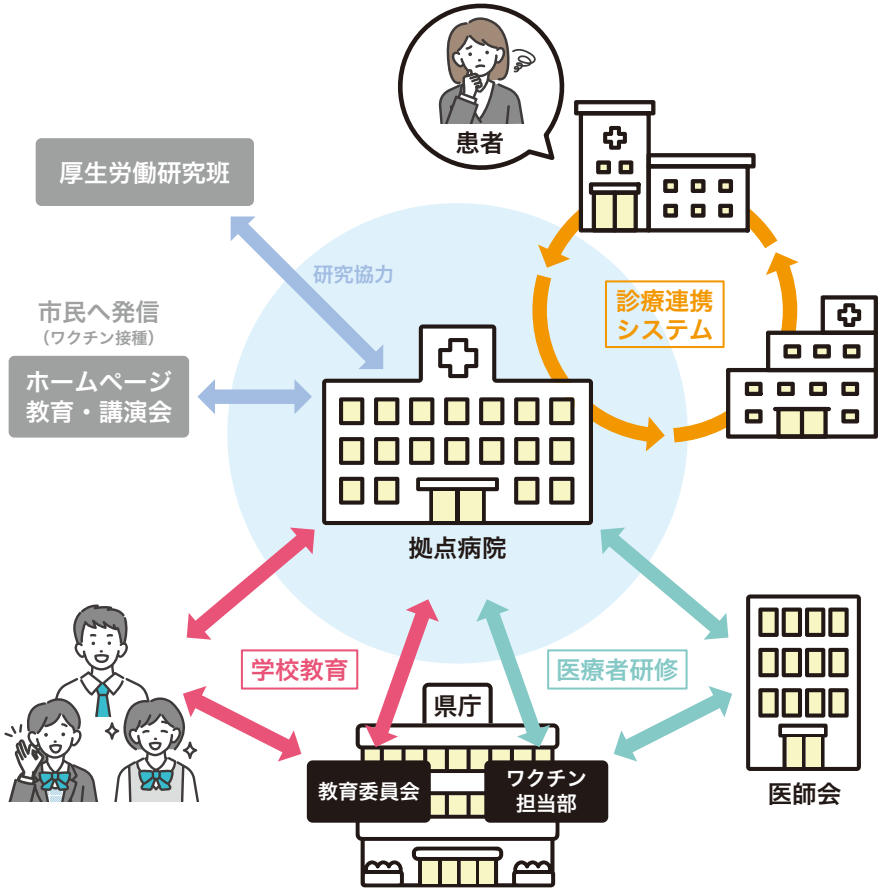
04 接種後症状が出たら、どこに相談したらいいの？

予防接種後に気になる症状が現れたら、接種をした医療機関やかかりつけのお医者さんに相談しましょう。さらに、次の窓口にも相談できます。

▶不安や困ったことがあるとき
お住まいの都道府県に設置された相談窓口（衛生部局、教育部局）にお問い合わせください。

▶予防接種による健康被害救済の相談をしたいとき
お住まいの市町村の「予防接種相談窓口」にお問い合わせください。

▶接種後に生じた症状に関する診療の相談（お医者さんを通じて相談します）
HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。
協力医療機関の受診については、接種をした医療機関またはかかりつけのお医者さんにご相談ください。



3 子宮頸がん検診って？

子宮頸がんに対してできることは・・・

一、にHPVワクチン接種
二、に子宮頸がん検診

なぜ検診は必要なの？

ワクチンでは感染を予防できない型のウイルスもあります。自覚症状がなく気づきにくい病気ですので、20歳から2年に1回検診を受けて、がんを早期に発見し治療しましょう。

どんなことをするの？

一般的な検診では、子宮頸部の細胞を採取して異常の有無を調べる5分程度の簡単な検査です。

検診を受けるにはどうしたらいいの？

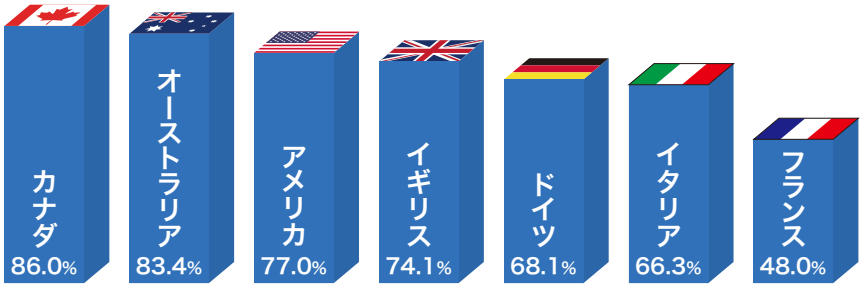
20歳になったらお勤め先やお住まいの市町村で実施しているか確認してみましょう。

4 世界の動きと日本の現状

HPVワクチンは、2006年に欧英で生まれ、使われ始めました。日本では2009年10月にワクチンとして承認され、接種が始まりました。世界保健機構（WHO）が接種を推奨しており、2025年2月時点ではWHO加盟国194か国のうち148か国で公的な予防接種が行われています。カナダ、オーストリアなどの接種率は8割以上です。日本では、子宮頸がんの罹患率・死亡率が先進国で最も高い水準となっていますが、近年少しずつ日本での接種者も増えつつあります。

日本の最新の接種状況は厚生労働省ホームページからご確認いただけます。

厚生労働省「定期の予防接種実施者数」https://www.mhlw.go.jp/topics/bcg/other/5.html ➡



【出典】WHO HPV vaccination coverage

5 最後に

子宮頸がんの多くは ワクチン接種と検診で、 予防できます。

痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について

ワクチン接種後より、広範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動（動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと）などを中心とする多様な症状が起きたとの報告がありました。この症状は専門家によれば「機能性身体症状」（何らかの身体症状はあるものの、画像検査や血液検査を受けた結果、その身体症状に合致する異常所見が見つからない状態）であると考えられています。このような「多様な症状」の報告を受け、様々な調査研究が行われていますが、「ワクチン接種との因果関係がある」という証明はされていません。また、同年代のHPVワクチン接種歴のない方においても、HPVワクチン接種後に報告されている症状と同様の「多様な症状」を有する方が一定数存在することが明らかとなっています。ワクチンの接種を受けた後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方は、これらの状態が起きる可能性が高いと考えられているため、接種については医師とよく相談してください。

安全性を定期的に確認しています

接種が原因と証明されていなくても、接種後に起こった健康状態の異常について報告された場合は、審議会（ワクチンに関する専門家の会議）※において一定期間ごとに、報告された症状をもとに、ワクチンの安全性を継続して確認しています。

※ 厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会 等